

授業力向上に向けての取組

—「とくしま 授業技術の基礎・基本」の制作—

学校経営支援課 齋藤 大輔 植原 浩之
市瀬 佐代 松永 健治

要 旨

採用となり2年目を迎えた教員を対象にした授業力向上研修において、昨年度の受講者が自分を振り返って行った授業点検シートの結果から、教職経験の浅い教員が授業を進めていく上で、何を課題としているかを分析し、課題解決の手立てとなる方法をまとめた。

キーワード：授業力向上，授業点検シート，発問，板書，ノート指導，ICT活用

I はじめに

徳島県立総合教育センターでは各種の研修を行い、授業力の向上に努めている。中でも、初任者研修や採用となり2年目に受講する授業力向上研修の受講者には、各教科の指導における授業の基礎的・基本的な授業技術に関する研修を行い、授業力の向上を図っている。また、各種の手引書も配付し役立てているが、教職経験が浅い教員が抱えている課題に絞った手引書が作成されていなかったため、視覚的に見やすく、ポイントを絞った「とくしま 授業技術の基礎・基本」を作成することで、より授業力の向上を進めていきたいと考えた。

まず、受講者が抱えている課題を、5月と2月に提出している「授業点検シート」「授業振り返りシート」（図1参照）から分析した。また、受講者が各校で行っている授業研究会での課題や、1年間の振り返りなどを記載している「授業力向上研修実施報告書」からも課題を見つけていくこととした。そして、課題解決の手立てとするための手引書として「とくしま 授業技術の基礎・基本」を作成することとした。なお、「とくしま 授業技術の基礎・基本」の作成に関しては、3年間継続するものとし、今年度は「教師が授業中に必要とする授業技術」からまとめることにした。

振り返りシート（提出用）			
課題把握のために5月に行った指導スキルの各項目の評価と、9～2月に行った評価を並べて記入することで、この一年間の研修の成果を確かめ、今後の指導に生かしてください。			
指導スキル	項 目	評価(5月)	評価(9～2月)
発問・指示	① 分かりやすい発問・指示をしている。	4 3 2 1	4 3 2 1
	② 児童生徒の発言内容を授業に生かしている。	4 3 2 1	4 3 2 1
	③ 発問を精選し、工夫している。	4 3 2 1	4 3 2 1
	④ 児童生徒が話を聞こうとする状態になってから、発問や指示をしている。	4 3 2 1	4 3 2 1
	⑤ 正しい筆順で、誤字や脱字がなく板書ができ、文字の大きさや板書の量も適切である。	4 3 2 1	4 3 2 1

<図1 授業点検シート>

II 課題の抽出

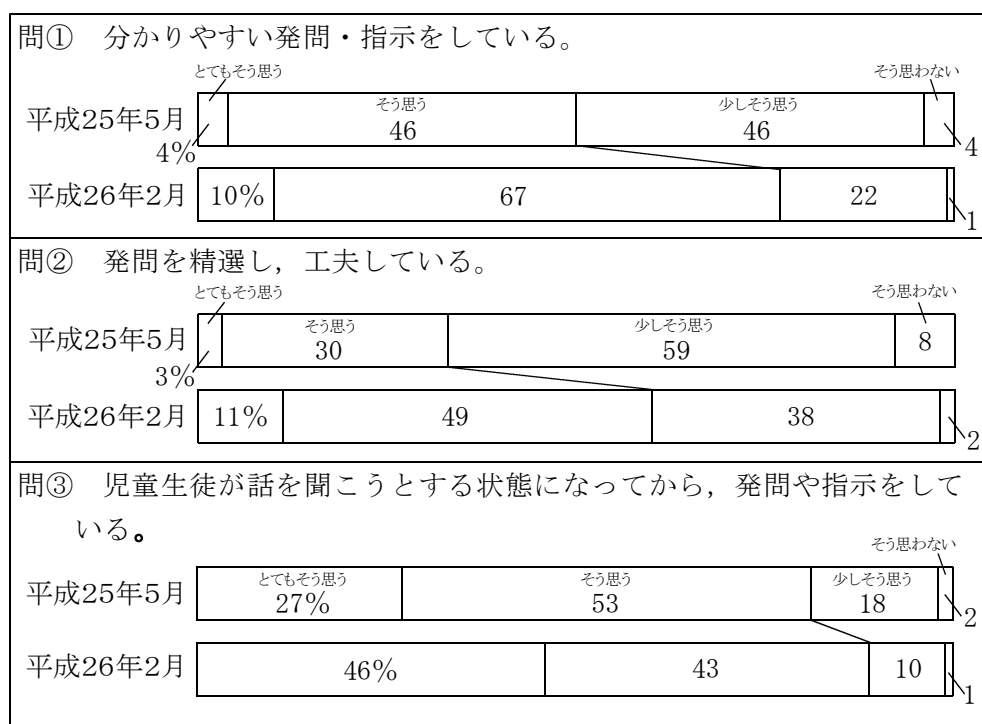
授業点検シートから、5月と2月のデータを集計してみると、ほとんどの指導スキルの項目に関して「とてもそう思う」、「そう思う」の割合は上昇し、2年目においても成果を上げていることが分かる。また、初任者研修で身に付けた多くの内容を生かし、実践していることも研究授業や授業研究会の記録から読み取ることができた。

しかし、まだ経験が浅く、「上手く授業を組み立てることができなかった。」「生徒が理解できなかった不安である。」といった回答もあり、悩んでいる教員も少なくない。そこで、授業点検シートのデータ分析や記述事項から、「発問」「板書」「ノート指導」「ICT活用」の4項目に絞って「とくしま 授業技術の基礎・基本」を作成した。

Ⅲ 発問について

1 授業点検シートの分析から

平成25年度の授業点検シート、発問についての項目「問①分かりやすい発問・指示をしている。」
「問②発問を精選し、工夫している。」「問③児童生徒が話を聞こうとする状態になってから、
発問や指示をしている。」(図2参照)では、以下の結果となった。どの項目も「とてもそう思う」
「そう思う」の合計数が増加している。発問の大切さを認識するようになったことが窺える。



<図2 「授業点検シート」「授業振り返りシート」のデータより作成>

授業点検シートでは、次のような課題が挙げられている。

- 分かりやすい発問・指示を、工夫したり精選したりしなければならないと感じた。(小)
 - 発問をしても児童の考えが深まらなかったとき、次にどのような発問を行えばよいのかが分からず困った。あらゆる状況を想定した二次発問を考え、思考が深まるようにしたい。(小)
 - 発問や指示では、簡潔にポイントをおさえて発言し、生徒の理解度を確認しながら進められるようになることが目標である。(中)
 - 問いかけ方を少し変えるだけで、生徒の考え方や理解度が変わってくることが実感でき、生徒の思考を促す発問の大切さを感じた。(中)
 - 生徒の思考を深める発問を設定することで、生徒の理解を助けることを心掛ける。(高)
 - 生徒の考えが広がるような発問をすることが苦手で、いつも一問一答型の発問しかできないので、いろいろな資料を参考にしながら研究していきたい。(高)
- ※ (小)は小学校、(中)は中学校、(高)は高等学校を示している。

このように、発問の重要性を認識しているが、どのような発問をすればよいのか分からない、といった意見が多く出ている。そこで、授業点検シートから出てきた意見を「発問とは?」「発問の仕方」「発問の取り上げ方」の3つのポイントとしてまとめ、「とくしま 授業技術の基礎・基本」を作成した。

2 発問についての3つのポイント

(1) 発問とは？

発問とは、児童生徒の様々な能力を引き出し、それを伸ばし発展させるために、教師が発する問いである。精選された確かな発問により、学習者は深く思考し、学習内容を身に付けることができる。発問は授業の成否を決める重要な要素であり、綿密な発問計画を立てておくことが大切である。

学習指導過程の中で、いつ、どのような発問をすればよいのかは次の通りである。発問をする条件は、次の5つが挙げられる。

- ① 簡潔明瞭で、一つの発言には一つの事柄を入れ、一度聞いたら分かる発問。
- ② 計画的・意図的で授業の最後を見通す発問。
- ③ 学習者の実態に合っていると同時に、学習者の個人差を考慮している発問。
- ④ 学習目標を達成するために、段階的な発問。
- ⑤ 学習者が興味・関心をもつような発問。

また、教師の注意すべき点として、話すことに集中するあまり、学習者の考える時間を奪ってしまう傾向になりがちなのが挙げられる。発問の内容に応じて、学習者が考える間を取ることが大切である。

発問は授業の柱である。授業の展開の中で、いつどんな発問が効果的であるかを考えなければならない。生徒に付けたい力が付くよう、発問の言葉を練り精選しなければならない。

(2) 発問の仕方

学習指導過程に沿って、発問することが大切である。①導入時②展開時③終末時に、以下のことを意識して発問する。①では、学習者全員が応答できるような発問を用意し、学習内容に対して興味・関心や課題意識をもたせて学習意欲を喚起させる。②では、考えや思いを深めたり広げたり、疑問を投げかけたり、比較・対照させたりする発問で学習を発展させる。③では、学習の結果を整理したり評価したりする発問で、成果や課題を認識させ、次の学習への見通しをもたせる。授業の中で学習目標を達成するために中心発問があり、それに向かって補助発問が構成されることが大切である。

また、解が限定されない発問では、想像したり、対比したり、批判したり、新しい考えを生み出したりするなど、多様な心の動きを促す発問が望ましい。

(3) 発言の取り上げ方

発言を的確に評価し、発言を通して一人一人の考えの良さやつまずきを見抜き、指導の手立てを工夫する。つまずきから学習者の課題を把握し、どこに戻って考えればよいかを指示する。(フィードバック)

また誤答は、他の児童生徒への思考のヒントにもなる。(発言の教材化) 誤答を大事に扱うことで、クラス全体で学習する機会となり、集団としての学びを高めることもできる。このように、児童生徒の発言の内容に教師は大きな価値を見出し、授業の流れを作っていかなければならない。それとともに、集団の中で学習者が発言する価値を大いに認め、激励する姿勢を常にもたなければならない。

発問について

ポイント1ー発問とは？
ポイント2ー発問の仕方
ポイント3ー発問の取り上げ方

① 簡潔明瞭で、一つの発言には一つの事柄を入れ、一度聞いたら分かる発問。
② 計画的・意図的で授業の最後を見通す発問。
③ 学習者の実態に合っていると同時に、学習者の個人差を考慮している発問。
④ 学習目標を達成するために、段階的な発問。
⑤ 学習者が興味・関心をもつような発問。

ポイント2ー発問の仕方
① 導入時
② 展開時
③ 終末時

ポイント3ー発問の取り上げ方
① 発言を的確に評価する
② 発言を教材化する
③ 発言を促す

(発問についてのリーフレット)

IV 板書について

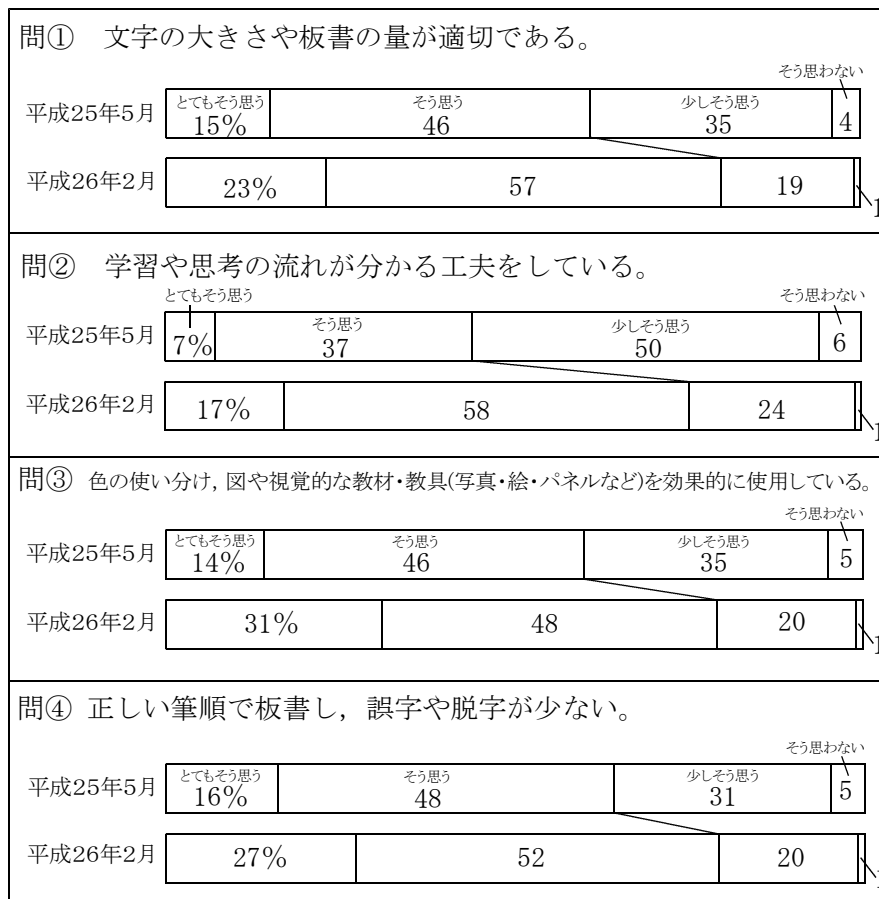
1 授業点検シートの分析から

平成25年度の授業点検シートを用いた振り返りを行ったところ、板書に関わる4項目「問①文字の大きさや板書の量が適切である。」「問②学習や思考の流れが分かる工夫をしている。」「問③色の使い分け、図や視覚的な教材・教具（写真・絵・パネルなど）を効果的に使用している。」「問④正しい筆順で板書し、誤字や脱字がない。」について、いずれの項目も、新年度当初の5月より学年末の2月の回答の方が「とてもそう思う」「そう思う」（図3参照）の回答を合わせた結果が増えていた。教職経験を重ねるにつれ、自分自身のできることが多くなっていると自己評価する教職2年目の教員がいる一方で、20%から25%の教員は、「少しそう思う」「そう思わない」と捉えているという状況が分かった。

具体的には、「問①文字の大きさや板書の量が適切である。」「問③色の使い分け、図や視覚的な教材・教具を効果的に使用している。」「問④正しい筆順で板書し、誤字や脱字がない。」のように、年度当初から全体の半数以上が前向きに捉えている項目もあれば、

「問②学習や思考の流れが分かる工夫をしている。」のように、児童生徒の反応も含めて学習指導と関わらせて考えたとき、取組への難しさを考えている教員の割合が多いことも見受けられた。授業力向上研修実施報告書においても、次のような課題や成果が挙げられている。

- 発問や板書等を計画的に行うように気を付けてきた。最近になって手応えを感じている。（小）
- 板書計画を立てるだけでなく、常に構造的な板書を心掛け、予想していなかった子どもの発言に対応し、子どもの思考の流れに沿った授業展開に努める。（小）
- 板書計画は、授業の流れを書いてまとめるだけで、目的や課題が明確な授業が行える。生徒にとっても、安心して授業を受けることができるのではないかと思う。（中）
- 板書に関する技術が、この一年間で向上したと実感している。1時間の授業で書く板書量は、



＜図3 「授業点検シート」「授業振り返りシート」のデータより作成＞

黒板1枚分に収まるように調整できるようになった。(高)

このように、若手教員が板書については重要であると考えていることや、板書の文字の大きさや板書の量、色の使い分け、図や視覚的な教材・教具を適切に使用すること、正しい筆順で板書し、誤字や脱字がないことなどの具体的な指導技術だけでなく、学習や思考の流れに沿うような板書中の具体的な指導や配慮事項との関連も求めていることが見えてきたので、板書について「板書の量」「文字の大きさ」「板書中の指導」の3つのポイントにまとめ、「とくしま授業技術の基礎・基本」を作成した。

2 板書についての3つのポイント

(1) 板書の量

授業では、1単位時間に黒板1枚程度の板書量が適切であると言われている。書いたことを消さないように計画的に板書を行い、1単位時間の終わりに板書を見たときに、その1時間の授業の流れや、授業の大切な場所はどこかが分かるような構成にする。教科によって単元名や課題、めあてやまとめを書く位置は異なるが、基本的な板書のスタイルをもつことが、授業を受ける児童生徒がノートに書き取りやすくなる。特に小学校の教員は、全教科等を指導するので、教科ごとの特性を踏まえつつ、どの授業にも通底するクラスのきまりを定めるとよい。

(2) 文字の大きさ

児童生徒の発達段階に応じた文字の大きさがある。さらに、教室の一番後ろの席から見ても分かりやすい大きさの文字を書くように心掛ける。授業中に机間指導を行いながら、時には教室の後ろから自分の板書を眺めてみる機会も必要である。このことは、ICT機器を使用する場合も同様で、スクリーンや大型テレビの向きや、絵・図の大きさにも気を付ける。

(3) 板書中の指導

学習や思考の流れに沿うように、板書中の具体的な指導や配慮事項との関連を板書中の指導を図4のリーフレットにして示している。児童生徒の思考の流れに沿うためにも、児童生徒とともに板書を創り上げることが鍵になる。教師からの説明やまとめを書くだけでなく、児童生徒が発言したことを板書にとどめることや、児童生徒の考えを板書に貼り、黒板で説明や発表ができる場面を設けることも有効である。学習の履歴として板書は重要である。

板書の優れた役目①学習内容を構造化してまとめる。②学習過程を分かりやすく整理して思考活動をさかんにする。③思考の手がかりとなる。の3点を大切に、児童生徒が見て、本時の目標が分かる板書を心掛けることで授業をより良く変えて欲しい。

図4は「板書についてのリーフレット」で、板書の重要性と効果的な板書の作成方法について詳しく説明しています。

板書について

板書には、次のような優れた役目があります。

- ①学習内容を構造化してまとめる。
- ②学習過程をわかりやすく整理して思考活動をさかんにする。
- ③思考の手がかりとなります。

※児童生徒が見て、本時の目標がわかる板書に。

ポイント1…板書の量

- ① 1単位時間に黒板1枚程度
 - ・書いた後消さないようにする。1枚に収まらないときは、補助黒板等を使用する。
 - ・黒板の下の方や両脇には書かないようにする。

【横書きの例】

② 学習の流れやポイントがわかる

- ・学習内容の大切な場所がわかるように板書計画を立てる。

ポイント2…文字の大きさ

- ① 正しい字形・正しい筆順
 - ・児童生徒は、先生の字を見て学ぶので、文字は丁寧に書くようにする。板書には、縦書きや横書きがあるが、斜めに曲がることなくまっすぐ書くようにする。児童生徒の座席からも黒板を見えるようにする。

② 後ろの席からも十分に読める大きさ

- ・学年に応じた文字の大きさを考える。一般的に小学校低学年では、15～20cm角、中学校・高等学校では5～10cm角に書ける程度の大きさを目安にする。
- ・掲示物の文字の大きさも考慮する。
- ・大型テレビや、プレゼンテーションのための視覚機器を使用する際には、機器の配置や教室の明るさに気を付け、黒板が見えにくくならないようにする。

ポイント3…板書中の指導

- ① 書きながら内容を確認
 - ・重要なポイントは強調する。
- ② ノートとの関連
 - ・児童生徒の書く速さを考えながら板書をする。
- ③ 児童生徒も黒板を使って説明
 - ・黒板で説明や発表ができる場面をつくる。
- ④ 授業のまとめに、板書の内容を確認
 - ・授業の内容を確認しながら振り返りをする。
- ⑤ 色チョークを有効に
 - ・色チョークを用い、図式化するなどの変化をつける。使う色への配慮も必要である。

【文部科学省「色覚に関する指導の資料」より】

⑥ 児童生徒に伝えたいことは何かをはっきりしておきましょう。

⑦ 「位置・内容・量」などに気を付けて板書計画を立てましょう。

⑧ どの教科等の板書も、児童生徒にわかりやすいよう工夫しましょう。

板書計画で授業は変わります！

〈図4 板書についてのリーフレット〉

V ノート指導について

1 授業点検シートの分析から

平成25年度の授業点検シートにおいては、「ノート指導」の項目は設けていないが、「発問・指示」「板書・ICT活用」などのスキルに不安をもっている教員が多くおり、その不安は経験とともに低下する傾向が見られる。同様に、「ノート指導」においても、授業力向上研修実施報告書において、次のような課題が挙げられている。

- 板書のまとめ方、精選された発問の工夫がノート指導にも活かされていくと感じた。(小)
- 授業の流れが分かるような整然とした板書の工夫が課題である。(小)
- 絵や掲示物を活用したり、チョークの色に変化を付けることで、視覚的に分かりやすい板書を行っていくことが大切であると感じた。(中)
- 視覚的な理解を助けられるような工夫を取り入れることで、子どもたちのワークシートに見られる記述もねらいに沿ったものになってきた。何を書いたらいいのか分からず、ワークシートに書く時間が嫌だった子どもたちも、その授業で分かったことや自分の気持ち、自分の体験が書けるように授業改善していきたい。(中)

このように、「ノート指導」の重要性を認識しているものの、具体的な指導のあり方に課題があることが分かった。そこで、「何を、何のために、どのように書くのか。」「ノート指導を通して、いかに児童生徒の学ぶ意欲を高めていくのか。」を「ノートづくり」「振り返り」「点検と評価」の3つのポイントとしてまとめ、「とくしま 授業技術の基礎・基本」を作成した。

2 ノート指導についての3つのポイント

(1) ノートづくり

これまでの児童生徒のノートを見ると、要点をしっかりとまとめられているノートもあるが、大半は式・計算・図・答えなどしか書かれていないことも多く、自分の考えた過程や友だちの意見などは書かれておらず、多数の考えからよりよい考えを導き出すといったものを読み取ることはできないという現状にある。また、基本的なノート構成についてもさまざまであり、吟味していくべき課題であると感じている。

ノート指導を重視し、ノートの書き方を工夫することによって、児童生徒の学ぶ意欲を高め、児童生徒の学力を確かなものにすることができる。ノートの書き方にはいろいろな方法があるが、まずは「基本的なことを全員ができるようになる」ことが大切である。

また、発達段階に応じたノート指導の在り方を次のようにまとめた。

① 小学校低学年のノート指導

この時期は、文字を書くこと自体が学習となってくる。したがって、練習的な使い方が中心となり、時間を十分にとって、文字や記号の書き方を指導しながら、丁寧に書かせることが大切である。

② 小学校中学年のノート指導

学習活動に少しずつノートを活かしていくことが大切である。考えことや感じたこと、分かったことや分からなかったことなどを書きとめさせ、それぞれの項目別に分けて書かせるなどの工夫を凝らしていくことも考えていく。

③ 小学校高学年のノート指導

ノートに書く内容や書き方に、個性が出てきやすくなるので、予習や復習を含めて自分の

思考の流れが見えるようなノートづくりができるようにしたいものである。また、人の話を聞きながら書いたり、調べながら書いたりすることができるような指導の工夫が必要である。そして、色を分けて絵や図をかいたり、復習しやすいノートづくりについても、この時期に習得させておきたい。

④ 中学校から高等学校のノート指導

この時期の傾向として、教師の書く板書のみを写し取って、テストの前にそれを見て暗記するということが見られる。小学校の頃からの継続的なノート指導が必要であるが、情報の収集や処理の仕方を培う基礎となったり、学習意欲や理解につなげたりするためのノートとなるような指導を改めて確認していく必要がある。

(2) 振り返り

① 児童生徒の立場から

学習内容の理解が深まり、定着に役立つとともに、考えが広まったり、深まったりする。また、自分の考えが整理されるとともに、説明にも役立てることができる。そして、「前の時間はどんなことを習ったのか」ということを、児童生徒が自分のノートを広げて確認し、学びの振り返りを行うことができる。

② 教師の立場から

「ノートに書く」といっても、その目的はさまざまであり、「何を書くのか」「何のために書くのか」ということを明確にし、その目的に応じた書き方を指導するとともに、板書計画を立て、分かりやすい板書ができるように教材研究をしていくことが大切である。また、自分の指導を評価する指標として、ノート指導を充実させていくことも重要になってくる。

(3) 点検や評価

ノート指導については、小学校低学年からのきめ細かな指導や学年・担任教師を越えて、学校全体で取り組む必要がある。特に、小学校でのノート指導が、ノートづくりのためのノート指導ではなく、思考・技能・表現の手段としてのノートとなるようにしていくべきである。

また、児童生徒の学力をより確かなものにするためには、ノート指導だけでなく、板書・発問・教材研究・評価などと相互に関連させる必要があると考えられる。

ノート指導について

書くことによって、児童生徒は思考過程を整理し、考える内容を明確にすることができます。

※何を、何のために、どのように書くのか。
※ノート指導を通して、いかに児童生徒の学びを深めていくのか。

ポイント1…ノートづくり

目的に応じた書き方の指導（考えをついたり、深めたりするノート指導）

【書き方の例】

学習目標・教科書のページ等	板書照写
学習経緯（めあて）	感想
板書照写	感想
（自分の考え・友だちの考え）	感想
学習のまとめ	まとめ

① 「思考対象が手元にある」よさを生かすために、板書と連動
・板書を写すだけでなく、自分の言葉で書かせる。
・言葉だけでなく、絵やイメージ図で自分の考えを表現させる。
・定型文を示し、模範を必ず書かせる。

② ガイダンスを実施し、記入方法や書き方などを確認
・記入方法や書き方などの基本的なことを全員ができるようにする。

③ 児童生徒の発達段階を考慮したノート（マス目・罫線の幅等）を準備
・付箋紙の利用、色使いの工夫、枠、アンダーラインなどで、構造化できるように指導する。

ポイント2…振り返り

① 学びを振り返ることができるようなノート指導
・「前の時間はどんなことを学習したのか？」と教師が聞いたとき、児童生徒が自分のノートで確認し、振り返ることができるような書き方を工夫する。

② 「自分だけの宝物」となるようなノート指導
・後から見直した時、どこに何が書いてあるかわかるノートにする。
・毎時間または単元ごとに、わかったことや疑問に思ったことを書き、学習を振り返る。

③ 意欲化につながるようなノート指導
・書くスピードや丁寧さなど、個人差にも対応する。

ポイント3…点検や評価

○ ノート点検や評価の工夫
・ノートの点検、教師の評価などを定期的に行い、助言や励ましの言葉、感想などを添える。
・ノートの上手なとり方の例を、コピーや学級便りなどの提示によって紹介し、効果的なノートづくりをすすめる。

◎ 各教科の特性に応じて、色分け・レイアウト・下線・吹き出し・矢印などを効果的に取り入れよう。
◎ 「自分の考え」を書く時間を確保しよう。
◎ 定期的にノートの評価を行おう。
◎ 理由や根拠、方法や考え方をノートに書かせよう。
◎ 条件（字数やテーマ）などに併せてノートに書かせよう。
◎ 授業で児童生徒のノートを活用しよう。

〈ノート指導についてのリーフレット〉

VI ICTの活用について

1 授業点検シートの分析から

各研修において、ICTの活用を進めている。そのことから、平成26年度の授業力向上研修の受講者への授業点検シートには、板書の項目の中に「ICT機器を効果的に活用している。」を入れている。その結果からは、「とてもそう思う」「そう思う」（図5参照）という回答が合わせて、半数あった。その教員はICT機器を効果的に活用していこうと考えているようであり、実践も行っている。

そして、研究授業においても、ICT機器を使った授業を試み、生徒の興味・関心を高めている。

問 ICT機器を効果的に活用している。			
とてもそう思う 19%	そう思う 31	少しそう思う 35	そう思わない 14

＜図5 「授業点検シート」「授業振り返りシート」のデータより作成＞

しかし、授業力向上研修実施報告書において、ICTを活用した授業後、次のような課題が挙げられている。

○ICTを活用することで効果的な場面と、ICTを活用しないで具体物で操作した方が効果的な場面があることが分かった。（小）

○ICT機器を使うときの教師の質問や説明、発問にも焦点を当てて、改善していきたい。（小）

○ICTや視聴覚教材の活用を試みたが、導入部分やまとめなどの、どのタイミングで使うか、どう指示を出すと生徒が注目するかなどが、まだまだ課題である。（中）

○ICT機器を使うのに集中しすぎて、生徒との会話が少なかった。（中）

○パソコンの映像を見せることに偏りすぎて、要点をノートに書き残しておくなどの配慮が欠けていた。（高）

○パワーポイントで、文章の穴埋めという手法だけでの授業では、生徒が思考せず、作業になっている部分がある。状況に応じて、板書とパワーポイントを使い分けるべきだ。（高）

このように、多くの教員がICT機器を活用しているものの、まだまだ、ICTを活用しての効果が得られていない場合がある。スクリーンや画面での文字が小さすぎたり、教材にあったICT機器が選択できていなかったり、説明ばかりになりノートに書く時間がなかったりといろいろと課題が残されている。そこで、今回は文部科学省「教育の情報化に関する手引」を参考資料として、各学校での授業研修会で出てきた意見を併せて、ICT活用を図るため「ICT活用の目的」「タイミング」「具体的な方法と場面」の3つのポイントに集約し、リーフレットにまとめることとした。

2 ICT活用についての3つのポイント

（1）ICT活用の目的

児童生徒が授業に興味や関心をもち、分かりやすくするために、ICT機器を活用しようとする場合が多く、研究授業でもICT機器を活用している場面は多い。しかし、ICT機器を使っていることだけに満足してしまい、一番重要な教育目標を達成することを忘れてしまっている場合がある。ICTそのものが、児童生徒の学力を向上させるものではなく、ICT活用が教員の指導力に組み込まれることによって児童生徒の学力向上につながっていくことを忘れていけない。また、ICT機器を使用した方が有効である学習内容であっても、題材や場面によっては、プロジェクタや電子黒板がいいのか、DVD等がいいのかなど、ICT機器の特性を十分に理解して判断する必要がある。

授業力向上研修での授業研究会の席において、画面が光る、文字が小さい、文字の色が背景

と重なってしまうなどの、見えにくい状況が課題として話し合われている。画面が見えない児童生徒にとっては、分かりやすくするためのICT機器であるが、教師や発表している児童生徒が何を説明しているのか、また、今何が問題なのかが分からない場合もあった。まず、授業の目的をしっかりと教師がつかみ、授業形態を十分に検討する必要がある。

(2) タイミング

(1) で述べたように、児童生徒が授業に興味や関心をもち、分かりやすくするために、ICT機器を活用するわけであるが、授業のどのタイミングで使用するかにより、その効果を何倍にもすることができる。

例えば、授業の導入においては、本時の課題の掲示や既習事項の確認をするために、児童生徒の興味や関心を高めるようなものが有効であると考えられる。そのためには、プロジェクタや電子黒板だけではなく、コンピュータ等で作成をした掲示物を黒板に掲示する方法もある。掲示物は、画面のように消えてしまうことがないので、児童生徒も集中して課題を確認することやノート・ワークシートなどの記入に関してもまとめやすい場合がある。課題の内容、指示の仕方を検討し、どのようなICTを活用するかを吟味する必要がある。

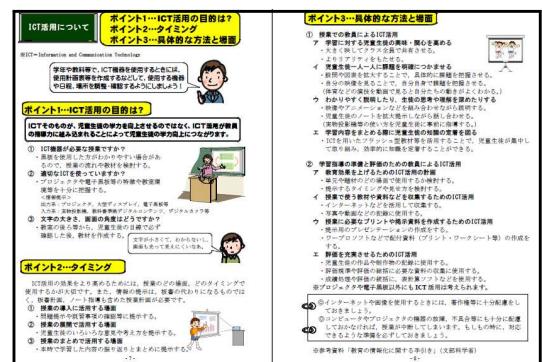
次に授業の展開では、児童生徒の多種多様な考え方を紹介するためには、できるだけ大きく拡大できる機器を使用する必要がある。また、発表する児童生徒が立つ位置や他の児童生徒にもはっきり声が届くように、大きな声で、ゆっくり説明させるなど、機器の操作以外の部分において、指導が必要である。

最後に児童生徒が本時の授業で学習した内容を振り返り、そして確認をするに行う場面では、どのICT機器を使用するにしても、長い文章でなく、文字の大きさ、色などにも配慮する必要がある。そして、その内容を見るだけでなく、きちんとノート・ワークシートに記入させることがもっとも重要である。画面やスクリーンを見るだけで、決して終わりにならないように配慮して欲しいものである。

(3) 具体的な方法と場面

デジタル黒板やプロジェクタ等の機器を扱うことだけではなく、インターネットを活用して収集した資料や、ワープロソフトで作成をしたワークシートやプリントなどの配付資料、表計算ソフトを使用した成績処理や評価の総括などもICTの活用に含まれる。このようなICTの使用方法は、ほとんどの教師が今までに授業等において実施してきているものである。例えば、ワークシート等について、いつどの場面で児童生徒に提供するかを考えているように、デジタル黒板やプロジェクタ等の使用も、計画的に、どの単元で、どの教材で使用するれば一番効果があるかを判断する力が教師には必要である。

すなわち、授業の中でICTを活用する場合、児童生徒の興味や関心を高めたり、一人一人に課題を明確につかませたり、分かりやすく説明したり、思考や理解を深めたりする場面において有効にするためには、そのスキルを教師が身に付けておく必要がある。そのためには、授業力の向上を図ることが不可欠である。ICTを上手く使い、児童生徒の学力の定着に役立てるためにも、方法や場面を検討し、効果的な実践をすることが重要である。



＜ICT活用についてのリーフレット＞

Ⅶ おわりに

Iのはじめにでも述べたように、本研究と「とくしま 授業技術の基礎・基本」は、3年間の継続研究として次のように計画している。

○1年次：教師が授業中に必要とする授業技術について（本年度）

「発問」「板書」「ノート指導」「ICT活用について」

○2年次：児童生徒を主体的に取り組ませるために必要とする授業技術について

例「発表の仕方」「話し合いの仕方」「ノートの取り方」「学習規律の在り方」など

○3年次：教師が授業前，授業後に行う内容に関して必要とされる技術について

例「教材・教具の作成」「教材研究の仕方」「ノート確認・指導」「学習指導案の作成」など

2年次の内容としては、児童生徒が授業の中で主体的に活動する場面を想定して、どのような支援をすることで、学習意欲や関心、学力の向上が図られるかについて、「児童生徒を主体的に取り組ませるために必要とする授業技術」について取り組んでいきたいと考えている。もう一つは、今回作成をした「とくしま 授業技術の基礎・基本」を、平成27年度の初任者研修や授業力向上研修の受講者の教科指導の研修の中で、実際に説明、活用してもらい、改善点が出てくれば改訂をしていく計画である。また、次年度以降は「授業点検シート」だけでなく、単独にアンケート形式で困っていること、悩んでいることをより細かく聞き取ることができる調査を行い、その分析によってよりニーズに合った手引きへと改善していくことも考えている。

今年度は、教師が授業を行う上での基礎的・基本的な授業技術として「発問」「板書」「ノート指導」「ICT活用について」について、「とくしま 授業技術の基礎・基本」を作成してきた。作成に当たり、どのような授業技術をどの程度まで詳しく記述すべきなのか、また他に必要とする授業技術はないのだろうかを考えてきた。今回の「とくしま 授業技術の基礎・基本」が若手教員の授業技術に少しでも役立ち、授業で「分かった」と言ってくれる児童生徒を一人でも多く育てることができるように、これからも支援を続けていきたい。

参考文献

- ・文部科学省「教育の情報化に関する手引き」
- ・文部科学省「色覚に関する指導の資料」
- ・徳島県教育委員会「平成26年度初任者研修のしおり」